

たまのよこやま



汐留遺跡特別展 『汐留紀行』 開催にあたって

当センターによって、旧国鉄汐留貨物駅跡地にあった汐留遺跡の本格調査が開始されたのは平成4(1992)年のことでした。以来、発掘調査は約10年間続けられ、この間、遺跡見学会の開催、出土遺物の展示、調査報告書の刊行などを行ってまいりました。現在も、室内整理事業は継続中ですが、最終報告書の刊行を平成18年度に予定しており、改めて、皆様に汐留遺跡をご理解いただけるよう、特別展を企画いたしました。

さて、今回の展示で私たちが心がけた点は、展示品として、今までに何度かお見せした代表的な遺物のほかに、従来あまりお見せしていないけれども汐留遺跡の特徴があらわれた遺物も取り上げてみよう、ということでした。それから、今回はただ遺物をお見せするだけでなく、一步踏み込んで、いったいこれらの出土品から何がわかったのかを、皆様にお伝えしようという企画も考えてみました。不十分な点やお気づきの点など多々あるかとは思いますが、晩秋の一日、『汐留紀行』を堪能していただき、東京の遺跡について思いを馳せていただければ幸いです。



1 汐留遺跡の概要

所在地：東京都港区東新橋一・二丁目、海岸一丁目

遺跡面積：約266,000㎡（汐留再開発地区総面積 307,100㎡）南北約1,100m、東西約270m

調査機関：汐留遺跡調査会（平成3～5年）／港区教育委員会（平成3年、5年）／

東京都埋蔵文化財センター（平成4～13年）

(1) 遺跡の成り立ち

汐留遺跡は、隅田川河口西岸域の低地に位置し、ほぼ旧国鉄汐留貨物駅跡地に相当する範囲です。本郷台下（神田小川町あたり）から広がる平坦な地形の南端域にあたり、現在の地表は、海拔約4mです。この地形は、本来、本郷台地から延びる台地が波の浸食により形成された波蝕台（「日本橋台地」と呼ばれる）である埋没地形上に形成されたものです。遺跡内において以上の埋没地形は、波蝕台に相当する浸食面が標高-0.8～-1.5m付近の平坦面に、さらに、台地の末端である波蝕崖が伊達家屋敷範囲内で確認された平坦面の末端を示す段差に、それぞれ示されます。また、波蝕崖に隣接して関東ローム層のブロックとともに約10,000～6,000年前の縄文時代早期の土器が出土しています。

江戸時代「前島」と呼称された半島状の砂洲は、この埋没地形を基盤として形成した沖積層です。江戸前島先端域に位置する汐留遺跡における江戸屋敷は、沖積層を基底とし、天正18(1590)年徳川家康の江戸入府以降、日比谷入江をはじめとする沿岸部の大規模な埋め立て及び地盤改良などの造成による都市「江戸」の基盤整備のなかで成立したものです。本遺跡は、江戸期を通じて大名の江戸屋敷とする武家地であり、明治維新後、御用地となり鉄道用地へと変貌をとげます。



東京の地形と汐留遺跡の位置



縄文時代早期の土器（左：撚糸文 右：貝条痕文）

(2) 江戸屋敷の変遷

汐留遺跡の範囲に含まれる大名江戸屋敷(ここでは芝屋敷と呼びます)は、脇坂家(寛文12[1672]年龍野藩5万3千石拝領)・伊達家(慶長5[1600]年仙台藩領62万石の確立)・保科(松平)家(寛永20[1643]年会津藩23万石拝領)・関家(元禄11[1698]年新見藩1万8千石拝領)・森家(宝永3[1706]年赤穂藩2万石拝領)の各屋敷です。また幕末には、江川太郎左衛門屋敷及び大小砲習練場がおかれしました。主な三家の芝屋敷は、次のような変遷をたどります。

脇坂家芝屋敷は、『武州豊嶋郡江戸庄図』が記す「脇坂淡路守下やしき」が最も古い記事で、寛永9(1632)年以前に下屋敷としての拝領をうかがわせます。明暦3(1657)年上屋敷への唱替に合わせ、海手側へ添地を拝領したようです。宝永4(1707)年、海手側の一部が道路用地として接収され屋敷は縮小します。

伊達家芝屋敷は、寛永18(1641)年芝下屋敷(増上寺付近)の替地で下屋敷として拝領します。延宝4(1676)年下屋敷から上屋敷へ唱替した後は、海手側の縮小(宝永4年)及び拡幅(寛保3年)があり、屋敷の形は変化します。

保科家芝屋敷は、寛文16(1639)年下屋敷として拝領します。万治元(1658)年中屋敷となり、さらに、延宝5(1677)年海手側の空地进行を拝領し、屋敷を拡張します。その後の各屋敷は、ともに形の変化はなく、幕末を迎えます。終焉は明治新政府の屋敷接収により、脇坂家屋敷は明治3年正月新道一番町邸へ、伊達家屋敷は同年2月13日「日比谷邸」へ移転します。保科家屋敷は、明治2年『大江戸図』において「明地」とあることから、戊辰戦争の後、早い段階で接収されたものと考えられます。

屋敷内で認められる主な遺構は、屋敷造成に関わる土留め施設(石垣・板柵・竹柵など)、屋敷外郭施設(石垣・板柵など)、建物施設(礎石・土蔵基礎など)、上水施設(桶・榎、木樋・竹樋など)、排水施設(石組・木組の溝)・埋設施設(桶・榎・土器皿などを埋めた遺構)、構築施設(石・木・瓦などを組み地下に構築した遺構)、土坑、船入場、屋敷境堀、池などです。また、屋敷内部の変化は、遺跡内の状況として、造成の過程や、整地の跡、火災・地震などの痕跡に示され、各屋敷の被災記録などとも照合し、遺構が造られた年代及び使われなくなった年代を想定します。

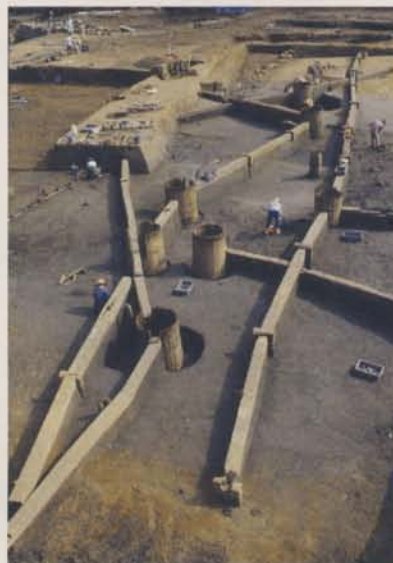


汐留遺跡と安政期の江戸屋敷

A	龍野藩脇坂家上屋敷(芝口)	8,255坪(約27,241㎡)
B	仙台藩伊達家中屋敷(芝口三丁目)	25,819坪余(約85,203㎡)
C	会津藩保科家中屋敷(芝新銀座)	29,492坪5合5勺(約97,325㎡)
D・D'	江川太郎左衛門屋敷他	6,634坪余(約21,892㎡)
E	赤穂藩森家上屋敷(芝神明前)	16,647坪7合(約54,937㎡)
F	新見藩関家中屋敷(増上寺表門前海手)	12,213坪(約40,303㎡)
G	浪御殿	
H	鶴岡藩酒井家下屋敷	
I	和歌山藩徳川家下屋敷	
J	小田原藩大久保家上屋敷	
K	仙台藩伊達家中屋敷	
L	中津藩奥平家上屋敷	
M	尾張藩徳川家蔵屋敷	



土留め竹柵(伊達家屋敷)



木樋と桶(伊達家屋敷)



御殿表向き建物礎石跡(伊達家屋敷)



船入場と水門(伊達家屋敷)

(3) しんばしていしゃ 新橋停車場の変遷と見つかった遺構と遺物

明治維新の後、汐留地区の大名屋敷地を接収した明治政府は、この地に日本で最初の本格的な鉄道関連施設の建設を計画します。それは新橋・横浜間鉄道の東京側の起点として、この汐留地区が選ばれたからで、駅舎やプラットホームをはじめとした旅客施設や貨物施設を明治5年9月12日(新暦10月14日)の開業に向けて建設することになりました。そして、開業後の明治10年代後半には、本格的な工場施設(新橋工場)が設置され、さらに30年代には発電所なども造られるようになります。

このように、新橋停車場は明治時代を通じて我が国最大の鉄道関連施設に発展していきましたが、大正3年、首都の新たな玄関口として中央停車場(東京駅)が建設されると、旅客駅としての役割をそこに譲り、貨物専用駅として生まれ変わることとなります。名前も汐留貨物駅となり、従来の「新橋」の名は、既に高架鉄道の一駅として開業していた「烏森駅」に与えられることとなりますが、これが現在のJR新橋駅に相当します。貨物駅になってからは、昭和9年頃に行われた大改築工事を除けば、特に重要な建物の建設は行われませんでした。

発掘調査によって見つかった鉄道関連の遺構には、駅舎やプラットホームをはじめとして、機関車庫、客車庫、転車台、修繕場、鍛冶場、鋳物場、器械場、外国人官舎、職員官舎など、様々な施設が挙げられます。特に駅舎及びプラットホームの遺構は開業時の姿を留めており、貴重な発見となりました。現在、遺跡のあった当地区は、「汐留シオサイト」として高層ビルが立ち並ぶ商業地区や住宅地区に変貌しましたが、その一画には、この二つの遺構が保存されており、さらにその上に駅舎とプラットホームが復元されています。

出土遺物は大きく、お雇い外国人が残したもの(西洋皿・クレイパイプなど)、職員が残したもの(改札鉄・工具・電信用紙など)、乗客が残したもの(切符・汽車土瓶など)などに分けられます。このほか、車両関係の部品や新橋工場で使われた工具類、建物の素材としての赤煉瓦や溶鉱炉などに使われた耐火煉瓦など様々なものが発見されました。また、鉄道施設の一部でもあるレールや罫子、それに鉄管・土管など近代ならではの遺物も見られます。レールには輸入品が多く含まれており、中には少数ながらイギリス製の双頭レールなどもありました。



機関車庫・転車台周辺の鉄道関連施設群



発電所周辺の工場群など



発見された駅舎の遺構



明治14年の新橋駅構内図

2 汐留遺跡における「鍋島」の様相

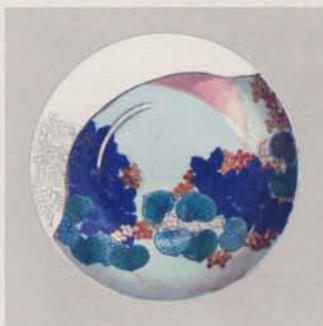
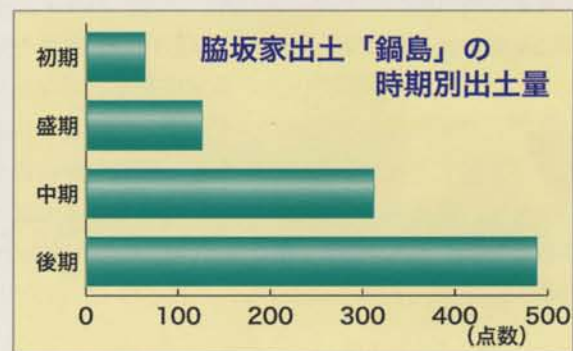
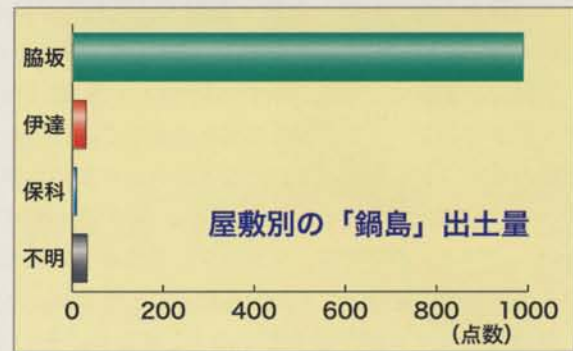
「鍋島」と呼ばれている磁器は、現在の佐賀県付近にあった鍋島藩が、将軍家や大名家等への献上・贈答用として、藩窯で特別に作っていたものと考えられています。その出来映えは、素晴らしいものが多く、「柿右衛門」や「古九谷」と並んで、日本磁器の最高峰といえるでしょう。

本遺跡からは、総計1,058点もの「鍋島」が出土しており、脇坂家屋敷から986点、伊達家屋敷から30点、保科家屋敷から9点見つかっています。特に、脇坂家屋敷からの出土量が多く、ほかの江戸遺跡を見渡しても、これほど多くの「鍋島」が出土している遺跡はありません。

次に、脇坂家屋敷出土の「鍋島」を詳しくみてみましょう。「鍋島」の製作年代は、その形や文様の特徴から、初期(1660年代～1690年代)、盛期(1690年代～1730年代)、中期(1730年代～1770年代)、後期(1770年代～幕末)の4期に分けられています。脇坂家から出土している「鍋島」は、初期63点、盛期125点、中期311点、後期487点となっており、時期別の点数も一遺跡からの出土量としては、非常に多い状況です。初期は、見込みに鶴文を描く七寸皿が複数個体分、盛期は、色絵葵文及び色絵唐草文の七寸皿と捻り文を描く染付小型変形皿が、中期についても見込みに竹笹文を描く染付七寸皿が複数個体分ずつ出土しており、それぞれ揃いで持っていたようです。初期から中期の製品について共通していることは、形と文様の同じ皿が何客か揃いで出土していることと、その多くが、天明4(1784)年の火事で焼けてしまったためにまとめて捨てられたものであることです。この時期の製品は、それ自体に贈答品としての付加的価値を伴っており、特に初期と盛期の製品はその価値が高かったものと考えられます。脇坂家から出土している製品も同規格の皿が何客かのセットで構成される贈答品であったと考えられ、屋敷内の土蔵などにまとめて大切に保管されていたようですが、火事のため使えなくなってしまったと予想されます。

後期の製品は、保管にあたって特別扱いをしていたと思われる出土状況は少なく、他の陶磁器と同様に出土しています。この時期の「鍋島」は、町屋等の武家地以外にも流通していることが分かっており、製品が持つ付加的価値の低下が出土状況に反映されているようです。

このように、初期から中期の製品と後期の製品では、製品自体が持つ付加的価値や保管形態に違いを認めることができ、脇坂家の場合は、これらの製品が各時期共に一定量以上出土している点が大きな特徴となっています。どのような経緯でこれらの「鍋島」が脇坂家にもたらされたのか。今後の大きな研究課題といえます。



色絵葵文皿
(盛期・七寸・脇坂家屋敷出土)



色絵葵文皿 (裏文様)



紫陽花文皿
(盛期・七寸・伊達家屋敷出土)



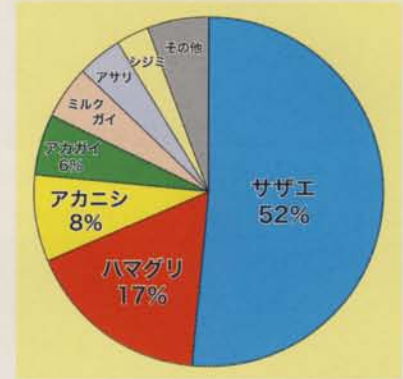
染付草花文皿
(後期・四寸・脇坂家屋敷出土)

3 大名屋敷内の食生活 — 出土した動物遺体から —

本遺跡からは、貝類・魚類・鳥類・哺乳類等の様々な動物遺体が見つかり、食用に用いたと考えられるものも多く含まれています。ここでは、それらを紹介し、大名屋敷内の食生活を垣間見てみたいと思います。

貝類は、遺跡内の様々な所から見つっていますが、多いのは、アカガイ、サザエ、アワビ、バイ、アカニシ、ハマグリ、ヤマトシジミで、大きな個体の多いことが特徴です。また、これら以外に、カキなども含まれており今とほとんど変わらないものを食べていたことが分かります。伊達家からは貝類がまとめて捨てられていた土坑も見ついています。この土坑は、大きさ3.8m×3m、深さ50cm程の穴で、形の分かる貝だけでも264個出土しています。種類別の割合は、サザエ、ハマグリ、アカニシ、アカガイの順となっており、これらは、屋敷の他地点からも比較的多く出土していることから、食材として用いられることが多かったようです。

魚類は、マグロ類が最も多く出土しており、その大きさは、小型から大型まで様々で、特に小型のマグロ類の出土が目立っています。他には、サケ、タラ、スズキ、カツオ、カサゴ、メバル、ブリ、ヒラメ、イワシ、アジ、キスなどの馴染み深い魚が見つかり、屋敷内での食卓を賑わしていたようです。鳥類は、ガン類・カモ類の出土が非常に多く、ニワトリ・キジ類がこれに続いています。カモ類は、植物食のマガモ類と動物食のハジロ類があり、おいしいのはマガモ類であると言われています。屋敷内から多く出土しているのもマガモ類であり、屋敷内でもよりおいしいものを好んで食べていたようです。この他にもブタ、イノシシ、スッポンなどの動物遺体が見つかり、バラエティー豊かな食材が、屋敷内の様々な人に食されていたのでしょう。



土坑から出土した貝の種類別割合

4 文字が語るものの流れと国元

出土した遺物の表面には、様々な文字情報がみられます。直接製品に刻まれた文字（記号含む）は、製品自体や内容物の生産地（者）を示すものが多く、たとえば、陶磁器には印刻で「清水」「相馬」「泉州麻生」など、石製硯は線刻で「赤間」「高嶋」、木製容器は焼き印で「守口漬之大根」などがあります。

また、墨で書かれた文字は、使用者の意識を反映した内容と考えられます。木製荷札などは端的な例で、送り主・受取人・送り元・受け取り先・荷の内容・数量など様々な情報が記されます。陶器では、購入した年月、金額、人物、使用したと考えられる屋敷内の部屋名（「台所」「茶方」「御納戸」他）、町名（「芝口町壺丁目」「露月町」他）などがみられます。また、陶器徳利・磁器皿では、釉薬を烈点状に剥いて屋号・店名などを記すなど、屋敷周辺の商家を想定させるものがあります。

国元と江戸屋敷間における物の動きを直接示しうる出土資料は、多いとは言えません。木製荷札・容器（曲物・樽など）の墨書文字では、江戸屋敷に運ばれた品物の一端をうかがい知ることができます。脇坂家屋敷出土資料では、「播州龍野山崎屋八郎兵衛」「播州龍野那波屋弥右衛門」など国元の商人より送られた「御用酒」の荷札が認められ、また伊達家屋敷資料の米の荷札には「遠田郡田尻」「陸奥国伊沢郡水澤村」など仙台藩領内の地名がみられます。文字資料以外では、瓦、土器焼塩壺などに国元で造られたと考えられる製品があります。各江戸屋敷から出土する瓦の多くは、おそらく、江戸近郊で焼造されたものを用いたと考えられますが、保科家屋敷出土の赤瓦と、伊達家屋敷出土の軒平瓦の一部に国元である城郭出土資料と類似するものがあります。出土量は極々微量ですが、瓦も国元から運ばれたものの一つであることが示された重要な事例です。土器焼塩壺は仙台城出土資料と同種のロクロ成形のもので二つのタイプがあります。一つは、器の下側に段をもつ形であり、おおむね良好な粘土を用いているものです。一方は、同じく下半に格子目叩きの跡を残す特徴があります。これらは言うまでもなく容器であり、内容物である仙台産の塩とともに江戸屋敷にもたらされたのでしょう。



左：若松城出土資料に対比できる保科家屋敷出土軒平赤瓦 中左：仙台城出土資料に対比できる伊達家屋敷出土軒平瓦（中心飾り：雪持笹文） 中右：同軒平瓦（中心飾り：四弁花文） 右：同ロクロ成形焼塩壺（格子目叩きの製品）

5 大名屋敷の道具

輸入陶磁器・色絵磁器や金蒔絵漆製品及び家紋が施されたものなどは、大名屋敷を代表する華麗な道具類と言えます。しかし、これらが出土遺物全体に占める割合はむしろ低く、大勢を占めるのはその陰に隠れがちな日常道具であり、最も出土量の多い陶磁器以外にも石・金属・木・植物繊維・骨角などで作られた様々なものが残されています。出土した主な道具類は、以下のとおりです。

建具・住・庭園関係：引き手(陶磁器・金属)・飾り金具・錠前・蝶番・釘・錠(金属)、金隠し(木)、箒(植物)、手水鉢・灯籠・石塔(石)

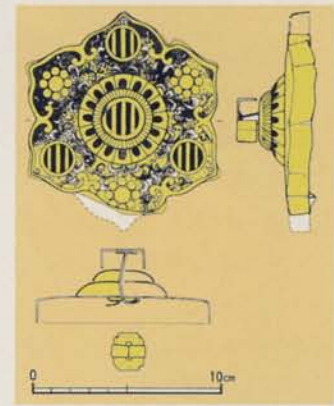
発火具・燈火具：火打ち石・灯明具(石)、手燭台・燭台脚(木)、火打金・燭台(金属)

台所道具・調理具・食膳具など：七輪・石臼・茶臼(石)、椀・皿・鉢・盆・膳・折敷・掃り粉木・まな板・蒲鉾板・箸・籠・杓子・柄杓・曲物・鍋蓋(木)、おろし金・網・包丁・分銅・秤皿(金属)、貝柄杓(骨角貝)

工具類：砥石(石)、砥石台・刷毛・掛矢・木槌・鋤(木)、鉤・錐・鋤先・鎌(金属)

文具：硯(石)、筆(木)、物差(骨角)

これら道具の屋敷内における使用目的・状況・場所を具体的に記す史料は、多いとは言えませんが、出土遺物とおして屋敷内の生活の一端を垣間見ることができるでしょう。たとえば、工具類からは屋敷及び屋敷周りの修繕などが想像されます。また一例では、鞆の羽口(土器)、網の錘(金属)とその鋳型(石)などは、鋳造の一端を示す遺物であり、屋敷内における製造の可能性を物語っています。



伊達家屋敷出土飾り金具



網の錘とその鋳型

6 お雇い外国人の遺物が見つかったゴミ穴

遺跡内から見つかった多くの遺構がいつ造られたのか、また、いつ掘られたのかわからない中で、構内東端で発見された大形の穴(土坑)は、掘られた年代が明治4年から8年頃までに限定できる貴重な遺構です。明治5年の駅開業をはさんだこの数年間は、駅建設のためにお雇い外国人が活躍した時期にあっており、この土坑から見つかった様々な遺物は、構内で生活していた彼らの姿を考える上で重要な情報を与えてくれました。分析表にはこの穴から出土したそれぞれの遺物の全体重量とその割合を記しました。各遺物の1個当たりの重さが違うので、単純にそれぞれが何個体あったのかの比較はできませんが、おおよその傾向はつかめるものと思います。

まず最初に気づくことは、ヨーロッパで作られた多くの皿やカップ、それにボトルなどのいわゆる西洋陶磁器が多く見ついている点です。ジンボトルやワインびん、ビールびんなどのガラスびんも大量に見つかりました。これらもすべて外国産の製品です。ほかには、ランプのホヤの一部やワイングラスなども捨てられていました。

この土坑からは明治時代の国産陶磁器や江戸時代の陶磁器も多く見ついていますから、すべてがお雇い外国人の生活用品だとは言えませんが、先に紹介した大量の外国製品のほかにクレイパイプなども見ついている点を考えると、この穴は主に彼らとその生活用品を捨てたゴミ穴と考えて問題はないでしょう。なぜ明治時代のゴミ穴に江戸時代の陶磁器が大量に入っているのか、様々な角度から検討しなければなりません。出土した明治時代の国産及び西洋の陶磁器、ガラスびんなどがあまり細かく割れていない点や復元率が高い(破片をくっつけて元の形になりやすい)のに比べて、江戸時代の陶磁器は細かい破片が多く、また復元率も低いという特徴を持っていました。この遺跡は、江戸時代には大名屋敷でしたから、このゴミ穴を掘ったときに周囲にあった古い陶磁器がまぎれ込んだか、あるいは、このゴミ穴を最終的に埋めたときに、埋め土の中に江戸時代の陶磁器が混入していた可能性などが考えられます。

出土遺物分析表

種別	重量(g)	全体比(%)
江戸磁器	9,682	8.1%
江戸陶器	29,073	24.2%
江戸土器	3,594	3.0%
江戸瓦	4,686	3.9%
明治磁器	5,271	4.4%
明治陶器	6,449	5.4%
明治土器	494	0.4%
明治瓦	416	0.3%
西洋陶磁器	11,071	9.2%
ガラスびん	49,386	41.1%
計	120,122	100.0%

7 鉄道施設に使われていたレンガ

当初の鉄道施設には、レンガ（建築用の赤レンガを指す。ほかには溶鉱炉などに使われる耐火レンガがある。）はほとんど使われていません。しかし、開業後しばらくすると、構内の施設にレンガが使われるようになります。これらの施設には、一つ一つ型に入れて作るいわゆる「手抜きレンガ」が明治時代を通して使われますが、明治20年頃に機械製のレンガが作られるようになると、この「機械抜きレンガ」を使った施設も造られるようになります。

一般にレンガには、「刻印」と呼ばれる文字やマークなどの見られるものがあり、構内の施設でも、この点は例外ではありません。この「刻印」が何を意味しているのか、分からない点が多いのですが、「中村」や「和田」などは、東京府内のレンガ工場に同じ名称のものが確認できるので、工場名で間違いないと考えられます。しかしこのような例はまれで、多くは数字やカタカナ、図形などその意味を特定することが困難なものがほとんどです。製造工程上の何らかの記号の可能性もありますが、よく分かっておりません。ちなみに、「桜のマーク」のものは、小菅の集治監しゅうじかんで囚人たちによって焼かれたといわれており、また「上敷免製」銘じょうしきめんせいのものは、埼玉県本庄市上敷免に工場があった日本煉瓦株式会社にっぽんれんがの「機械抜き」の製品です。

ところで、見つかったレンガのほとんどを占める「手抜きレンガ」はどこで焼かれたのでしょうか。明治から大正時代にかけて、府内の荒川や中川流域にはかつて数多くのレンガ工場がありました。「中村」や「和田」もその一つです。レンガは主に船を使って運ばれましたから、新橋駅構内で使われたレンガはそのほとんどがこれら荒川や中川流域の工場で作られたものと考えられます。しかし、現在これらの工場は一つも残っておらず、また当時の記録も少ないためこれを確認することが難しいのです。



「桜」マークのレンガ



「上敷免製」銘のレンガ

表紙写真：背景 旧新橋停車場跡 右上 明治時代の汽車土瓶 右下 江戸時代の陶磁器類 左上 明治・大正時代のガラスびんなど 左中 お雇い外国人が捨てたもの（西洋陶器・クレイパイプなど） 左下 江戸時代の下駄

今年度の企画展示「縄文土器ってなんだろう？」に沿って文化財講演会は「文様」を中心に6回行います。また、関連する行事で「もようをつくろう」・「拓本教室」を開講しました。以下は既に行われた行事について紹介します。

* 7月14日 第1回文化財講演会は、小栗一夫当センター主任調査研究員「縄文文様の素材」と題して講演がありました。これまで、縄文の原体については多くの論考がありましたが、縄の素材についてはほとんどないままでした。最近では縄の出土例が増加し、ここでは詳細な分析が紹介されました。



第1回文化財講演会

* 9月11日 第2回文化財講演会は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団金子直行主席調査員が「縄文をよむ-早・前期-」と題して、縄文時代の早期から前期にかけて文様及びその文様構成について紹介され、一つ一つの文様における意味や当時の縄文人が意図するものを講演されました。

* 6月26日 「もようをつくろう」は縄文土器を知る上で重要な縄がどのように、よ燃らされていたかを実際に再現してみようという企画でした。「こより」を燃らすことも昨今では行われなくなり、より高度な技術が必要とされる縄文土器の原体づくりに参加者の皆さんは真剣な眼差しで取り組みました。



拓本教室

* 6月26日 「拓本教室」は魚拓を例にすると想像できますが、なかなか馴染みのないものようです。しかし、肉眼ではなかなか分らない文様などが、拓本によって理解できます。画仙紙を使って皆さんは気に入った文様の土器の拓本を採って楽しんでいました。

「もようをつくろう」・「拓本教室」の二つの行事は10月にも行います。11月は「貝輪作り教室」「編布（あんぎん）作り教室」の新規行事を予定していますので、皆さんの参加をお待ちしております。

